西安事件

―剿共作戦と国共合作―

永橋弘价

目次

一　蔣介石の安内攘外作戦
二　抗日運動と国内統一戦線結成運動
三　西安事件
四　西安事件に対する各方面の態度
五　国共合作

一　蔣介石の安内攘外作戦

（一）　共産軍討伐作戦

第一次剿共作戦

地方軍閥による群雄割拠の状態が、長い間にわたる中国の本来の姿のように思われて来たが、しかし日本の中国侵略が露骨になるにしたがって、中国人の間に次第に中国統一の気運が高まって来た。中国国民党の領袖である蔣介石が、一九二九年から三〇年にかけての戦いで、山西の閻錫山、西北の馮玉祥の反蔣連合軍を打破することによって中国は曲りなりにも統一された。[1] 蔣介石は中央政府の権力を次第に強固なものにしつつ諸州の主席や軍閥の勢力を削減するとともに、これ等の軍隊を中央政府軍に編入して行った。しかし支配権の確立というには程遠い状態にあり、陰謀や叛乱が絶えず繰り返されていた。

一九三〇年七月二七日には彭徳懐の共産軍が長沙に突入し、またたくまに全市を占領した。紅軍はただちに長沙ソヴィエト政府の樹立と各種産業、銀行、交通機関の接収、各官庁およびすべての外国人財産を破壊すると宣言し、市内の各庁舎や大きな建造物に火をかけたので、列国の武力干渉の誘発が懸念されるようになった。外国の干渉を恐れた南京政府はただちに何鍵に長沙奪回を命じた。何は大軍を率いて進撃し、八月五日に同市を奪還した。長沙ソヴィエトは、わずか一〇日で崩壊したが、しかし蔣介石に与えた衝撃は大きかった。共産軍の脅威を感じた蔣は、本格的な共産軍の討伐を決意したのである。

永続的な中国統一を確立するために、蔣介石は、一九三〇年一一月南京において、国民党中央執行委員会全体会議を開催し「共産主義と土匪の根絶」を主眼とする「戦後五大計画」を決定した。蔣はこの方針に従って毛沢東、朱徳の率いる共産軍討伐を開始した。一九三〇年一二月二七日、蔣介石は八個師団一〇万の兵を率いて井岡山を根拠地とする共産勢力に対して第一次剿共作戦を敢行した。だが国民政府軍の第一八師団は赤軍によって殲滅され、師団長張輝瓚は捕虜となり②、譚道源の第一五師団も大敗を喫した。

第二次、第三次剿共作戦

第一次剿共に失敗した蔣介石は、益々共産党に脅威を感じるようになり、一九三一年五月には何応欽を討伐軍総司令として二〇万の兵力をもって第二次包囲攻撃を敢行したが、これも成功せず、七月には蔣自ら三〇万の軍隊を率いて第三次攻撃を行った。一時は共産軍の重要拠点吉安を占領し、一部は江西東南端の会昌城外に達し、第一八軍などは九月一三日にはソヴィエト区中枢部の瑞金の攻撃態勢をとったが、後半になるとまたしても赤軍が勢力を盛りかえし、占領地を奪回されたり、孫連仲麾下二万が叛乱し共産軍に投降するなど③、剿共作戦が停滞している中で、九月一八日に満州事変が勃発した。蔣介石は対日戦争のため攘外作戦に主力を注がざるを得なくなり、共産軍討伐作戦を中止した。

中華ソヴィエト政府の成立

中共軍はこの機に乗じて反撃し、再び失地を回復した。夏から秋にかけて江西、湖南、湖北、広西、広東、福建、安徽、河南の各省に勢力を拡大し、一〇万の労農赤軍を擁するまでになった。一九三一年一一月七日には、中国ソヴィエト第一回全国大会を瑞金において開催、六三名の臨時政府中央執行委員を選出し、毛沢東を主席に、項英、張国

燾を副主席に選任し、中央政府機関として、人民委員会を組織した。一一月二七日には、江西省瑞金に毛沢東による中華ソヴィエト共和国臨時政府が樹立された。党を結成して一〇年にして、はじめて中国共産党は中央政府と安定したソヴィエト区と正規軍組織を持つようになったのである。④ 中共軍は完全に再組織され、瑞金には青年将校、見習士官養成の軍官学校、造兵廠、軍事施設が建設され、共産主義の大軍事都市が現出した。

第四次剿共作戦

一九三二年五月五日に上海事変の停戦協定が成立すると、蔣介石は第四次剿共作戦を企図し、六月九日から一七日にかけて廬山において剿共軍事会議を開き、何応欽を剿共総司令に任命し、五〇万の兵力を動員して第四次攻撃を敢行したが、これもまた撃退された。⑤

蔣介石は共産軍討伐の兵を四たび起して、四たび敗れた。大軍を用いながら国民政府軍が苦戦を強いられた原因として次のようなことが指摘されている。

(一) 共産軍がゲリラ戦法を用い、農民と兵士の区別がつかず、蔣介石軍が農民や住民を殺戮することが多く、人民が国民政府軍に反感を持ち、共産軍に味方した。

(二) 国民政府軍は大義名分を持たず、士気が低かった。

(三) 共産軍の兵士は党の政策である土地分配、社会政策的施設に希望を抱き、狂信的に指揮に従った。

(四) 共産軍は地理と土地の事情に通じていた。

このような原因に加えて、一九三一年九月一八日には満州事変、三二年一月には上海事変が勃発した。蔣介石は掃共作戦から精鋭を誇る第一九路軍、第五軍を上海戦線に回さなければならなかった。日本軍閥は満州事変、上海事変

を起すことによって、蔣介石の中共軍掃討作戦を妨害、中断させ、紅軍の勢力をばん回、拡大させたのである。これは日本帝国の反共政策に反するばかりでなく、国共両党を合作へ向かわせ、支那事変を長期化、泥沼化させ、ついに太平洋戦争を誘発させる結果となった。

第五次剿共作戦

蔣介石は華北に侵入する日本軍とは積極的に戦おうとせず、共匪討伐と中国統一の完成を第一の目的と考えていた。国民政府は共産軍に対しては数次の攻撃を加えながら、満州、華北における日本軍の前線からは退却しつづけた。これは国家の独立を第一目標とすると宣言した国民政府としては矛盾した政策である。[6]

先ず国内を統一しその後で外敵を追いはらう政策をとり続けて来た蔣介石は、満州事変以後の熾烈な排日抗日運動が中国全土に行きわたるような情勢の中では、彼の対日妥協政策に反対する者も多く、しばしば世論の批判と攻撃にさらされるようになった。しかし彼は信念をまげず、一九三三年四月一〇日には、南昌の前戦司令部において、党・政・軍の要人千名を前に「先安内後攘外」政策を強調して共産軍討伐の急務を説いた。[7]

一九三三年五月に塘沽協定が成立し、華北政局が安定すると同年一〇月、蔣介石は第五次討伐作戦を実施した。[8]

今回の作戦にはフオンゼークトをはじめとする数十人のドイツ軍事顧問団が参加し、新戦術が用いられた。一九三四年四月一日には南昌において剿匪軍事会議が開かれ、総攻撃の計画が練られた。

兵力五〇ないし六〇個師団、飛行機五〇〇機、迫撃砲、野砲推定一五〇〇門総兵員約五〇万を動員した。[9]この攻撃には、経済封鎖、公路政策（自動車道構築）、碉堡政策（トーチカ構築）などの新戦術が用いられ、これが功を奏し、[10]一九三四年六月末までには、広昌・筠門嶺・連城・永安・建寧を占領、徐向前の首都横峰を陥落させた。一九三四年

一一月一〇日にはついに中央ソヴィエト区の首都瑞金を陥落させ、共産軍をして一年にわたる大長征に向わしめた。この二万五〇〇〇里（六〇〇〇マイル）におよぶ大西遷によって陝西北部に到着した共産軍は七万から三〇〇〇足らず、陝西ソヴィエトの劉子丹軍を合わせても、二万そこそこに激減していた。[11]

だが毛沢東が、この大長征は「宣伝隊であり、種まき機である」[12]と述べたように、単なる敗走に終らず、共産軍はこの大移動によって各地に共産思想を植えつけた。中国の広大な地域に扶植された潜在的な共産勢力はやがて、共産党が中国を支配する原動力となって実を結んだのである。

(二)　西南勢力の統合

蔣介石を脅すのは共産軍だけではなかった。表面上は妥協していたが、広東・広西派の間には依然として反蔣活動がくすぶり続けていた。また国民党内部にも蔣介石の独裁傾向に反対する汪兆銘などがおり、相呼応して、機会ある度に炎となって燃え上った。

一九三一年二月二八日に蔣介石が反対派の胡漢民を逮捕、監禁したのを契機として広東派は「倒蔣」を呼号して一斉に決起し、陳済棠が広東を支配するようになった。これに汪兆銘や陳友仁などが加担して、同年五月には広東国民政府を作った。[13]広東政府は四ヶ月にわたって南京政府と対峙したが、満州事変の発生とともに、胡漢民の釈放を条件として和平統一交渉を行い一二月には南京政府と合体した。

一九三三年一一月二〇日福建州の福州で、広州派の李済琛、一九路軍系の陳銘枢、蔡廷楷、国家主義青年党、馮玉祥派の陳友仁等が中共の呼びかけに応じて反蔣政変を起し、福州に中華共和国人民革命政府を樹立し、[14]独立を宣言し

た。

同政府は瑞金ソヴィエト政府と「抗日反蔣協定」を結んで南京政府に反抗したが、蔣介石は共産軍討伐作戦から一〇万の軍隊をさいてこれに当て、またたくまにこれを鎮圧した。その早さは共産党が「人民革命政府」を援助すべきか否かを決定するひまもない程であった。[15]

一九三六年になると「統一」と「抗日」が中国国民の心をしめるようになった。国内の如何なる勢力もこの二つの潮流に対抗することはできなくなり、中央政府に反抗的だった地方軍閥も「統一阻害」の非難を恐れて「中央擁護」「中央政府に服従」の態度を示さざるを得なくなった。

このような中で「西南政府は日本の支持によって成立っている」とのうわさが立ったので、広東の李宗仁は一九三六年二月八日「西南政府と日本の密約説」について「広西が日本から兵器を購入し、教官を招聘したのは事実であるが、外間（当局以外の人々の間から）伝えられる日本と広西の密約締結説等は、全く虚構の流言で事実無根である」[16]と否定した。そして一九三六年四月一七日には李宗仁は抗日宣言を出し、五月一二日に西南勢力の中心人物、胡漢民が抗日、反共、反独裁を内容とする遺言を残して死去すると西南派の反蔣活動は俄然活発化し、南京政府と西南政府の関係は急激に緊張感を増した。

これまで、日本に介入の口実を与えることを恐れて、武力による鎮圧を差控えていた蔣介石は、日本と西南政府との間に関係のないことを知って西南政府弾圧を決意した。しかし中国国民が内戦に反対であること、財政危機であること、抗日に反対すると民衆の信頼を失う恐れのあること等を考え、出来うるかぎり政治的、平和的な工作による解決を望んでいた。蔣介石はあらゆる手段を用いて西南派の懐柔に当ったが妥協に達せず、ついに雲南の共産軍を掃蕩

して中央の支配下においたのを機に、雲南、貴州、湖南、江西、福建の各省から包囲し、両広を武力によって征服しようとした。

西南、南京間の「統一条件交渉」決裂とともに、六月二日西南執行部は「蔣介石氏が外侮に対し国軍を以って何等抵抗を試みず、福建・江西・貴州省等に大兵を集結せるは、西南問題を武力によって解決しようとする国賊的行為である。故に西南は世論に鑑み、速かに革命戦線を総動員して国賊の討伐に当るべし」[17]と宣言して、南京政府に対し反蔣介石の軍事行動を起した。

支那統一、内戦停止の世論が大勢をしめていたので、中央反対の旗幟を鮮明にすることの出来なかった西南派の李宗仁は自分の軍隊を「国民抗日救国軍」と称し六月八日反蔣の名目として「抗日」政策を取り次のように述べた。

一、日本との全ての関係を絶ち、日支間に締結した協定を全て取消す

二、今回の北伐の目的は抗日であって、全ての内乱に反対する

三、全ての党派、軍隊、抗日民衆が我民族革命戦線に参加することを望む[18]

西南政府はこのように国民政府の無抵抗政策に反対し抗日救国を大義名分として対蔣戦の準備を行い、六月二三日、陳済棠が抗日救国軍第一集団軍総司令に就任した。陳はその宣誓の辞において、一、抗日救国、二、共匪撲滅、三、独裁制打倒の三点を強調しさらに「西南の抗日出師を対内的または個人に対するものと云う者もいるが、西南は個人または中央攻撃をするなどとは一言も発していない。我々は蔣委員長の下で抗日救国に当ることを望む」と述べた。同日李宗仁も「今回の国難は南京側の不抗日に原因がある。」[19]との談話を発表した。このように西南の指導者達は表面上は強硬な態度を見せたが、内部の団結はそれ程強靱なものではなかった。

陳斉棠の部下、第一軍長余漢謀その他高級将校が次々と蔣介石側に寝返り、全広東空軍が国民政府に投降し、七月十八日には海軍も中央帰順の通電を発し、広東軍は内部崩壊した。七月一八日陳斉棠は余漢謀に下野を知らせる電報を打ち、イギリス艦で香港に亡命したので、広東は完全に中央の手に帰した。広東が中央の手に落ちた後も、広西の李宗仁、白崇禧は依然として中央の命に服さず中央からの、広西退去命令にも応じなかった。蔣介石は八月一一日に広東に赴き、李と白を呼んだが、二人は蔣の召集命令を拒絶した。

蔣はその後も李宗仁および白崇禧との交渉を続けたが八月二四日成都事件が発生し、蔣介石も永く広東に止まることが出来ない状態となったので、九月六日に、㈠李宗仁を広西綏靖主任に任じ、全広西軍を李の統率下に置き、広西省の財政は国民政府がこれを処理し、白崇禧を軍事委員会常務委員に任ず、㈡李済琛を外遊させ、帰国後中央の要職につける、㈢一九路軍を中央軍と認め、軍費は中央が支給し、同軍を海南島の守備に当てることを条件に西南派の独立運動を終熄させた。[20]

二　抗日運動と国内統一戦線結成運動

このように中国国民の間に抗日統一戦線結成運動が盛上る中で、蔣介石はあい変らず、日本との妥協を求めていた。一九三四年一〇月には親日派の何応欽を国民政府軍事委員会北平分会長としたが、日本軍は華北侵略を具体化させ、一九三五年六月一〇日梅津・何応欽協定を結ばせ、国民政府直系の第五一軍を華北から撤退させ、国民党華北支部も解散させられたので、何応欽も北京を去った。

蔣介石は「先安レ内後攘レ外」政策をかかげ積極的に抗日運動を抑止して日本との妥協をはかった。だが、日本との衝突を回避するために結んだ梅津・何応欽協定は、反日感情を益々悪化させ、抗日運動は共産党の影響下にあったので国民政府は次第に苦しい立場に立たされるようになった。日本軍の侵略行為によって中国民衆の反日運動は中国全土、なかでも華北、華中において猛烈な勢いで燃え上った。[21]

前述のように蔣介石は一九三三年、共産軍に対して第五次剿滅作戦を開始した。この作戦には南京政府の有する全軍需物資が投入され、ドイツの軍事顧問が作戦を立て、重砲、戦車、空爆および毒ガスまで動員したこの大反共攻勢によって共産軍を包囲した。しかし、一〇万の共産軍がこの包囲網を突破して湖南、広東、広西、貴州、雲南、四川、西康、青海、甘粛の各省を通って全行程六〇〇〇マイルにおよぶ大長征のすえに陝西省北部に到達した。[22] しかしこの大長征の間に兵員の数は、さらに半数以下に減少するという惨澹たるものであった。一九三五年八月一日中国共産党はこの「長征」の途上「八・一宣言」―「抗日救国のために全国同胞に告ぐるの書」を発表し、内戦の停止と抗日統一戦線の結成を国民党に呼びかけ、統一のためには中央政府の命令に服従することもいとわない、と声明した。[23] この時点で中国共産党はソヴィエト革命から抗日民族統一戦線結成へ政策を転換したのである。中国共産党は政権奪取よりも、内戦を停止し、国民党やその他の政党と一緒に人民民主主義政府を作って、日本に抵抗して中国独立のために戦うことを当面の目標としたのである。[24]

一九三五年一二月二五日、中国共産党中央政治局は「現下政治情勢と党の任務」に関し「日本帝国主義を中国から駆逐し、日本の走狗による中国の統治を打倒し、中国民族の徹底的解放を争取し、中国の独立と領土の完璧を保持するためには、総てが団結して起ち、神聖な民族革命戦争を発展せしめねばならない。広汎なる『抗日統一戦線』唯こ

れのみが、日本帝国主義とその戦に勝つ手段である。」と決議した。かくて中国共産党は「われらの任務は一切の反日勢力を団結せしめ、全人民をして、力あるものには力を、金あるものには金を、銃ある者には銃を、知識ある者には知識を出させ、あらゆる中国人を反日戦線に参加させ、幾百幾千万の民衆を武装せしめることである。」[26]との八・一宣言に基づいて各党、各派の連合からなる、抗日統一戦線の結成に着手し、一九三六年二月二一日、中華ソヴィエト政府の名において、全国抗日救国代表大会召集の通電を発して、速に右大会を召集することと、左記事項の実行を主張した。

一、国民党による一党独裁の廃止、全ての党派の自由活動の許容、全ての政治犯の釈放

一、抗日反売国賊運動禁止令の廃止、言論出版、集会、結社の自由の保障

一、内戦の停止、一致抗日討逆[26]

中国共産党の抗日統一戦線結成の宣伝は大きな効果を上げた。共産軍の軍事勢力は蔣介石の軍事的な圧迫によって、大きな打撃を受けながらも、抗日統一戦線は次第に勢力を増大していった。一九三六年六月には、抗日運動は、各界の救国会の組織から、全国各界救国連合会、全国学生救国連合会、婦人救国連合会等の結成へと発展していった。その結果、各地で日本人経営紡績工場のストライキや成都事件、北海事件、漢口事件などの対日テロ事件が相次いで発生するようになったのである。

一九三六年八月二五日共産党は国民政府に国力を集中して、一致して外敵にあたることを要求するとともに、国民党と共産軍の国共合作を提案した。だが、蔣介石は抗日運動抑制の手をゆるめず、十一月二二日には上海において、「全国救国会」の指導者、沈鈞儒、章乃器、鄒韜奮、王造時、季公撲、沙千里、史良等七人を逮捕した。[27]

東北軍や西北軍への影響に脅威を感じ、延安の共産軍を放置しておくことが出来なくなった蔣介石は、中国共産党の要求に応ずることなく、さらに大規模な剿匪作戦を開始した。

三　西安事件

張学良の叛乱の背景

中国共産党の陝西北部侵入は、華北、新疆または外蒙古経由による中ソ提携の分断をしようとする、華北の監視、対ソ戦のための交通路の確保を目的とする日本の内蒙古作戦、中国西北部制圧作戦を脅威にさらすことになる。それと同時にこの共産軍の綏遠入りはソヴィエト化した外蒙との接続による新たな赤色ルートの設定を意味し政治的な影響力も小さくない。日本軍にとって中国共産軍は無視することのできない敵となったのである。[28] このことは、日支交渉における日本側要求の三大眼目の一つに防共協定の締結が挙げられ日支国交調整の根本条件となっていることからも明らかである。

他方南京政府は、日本軍の支援下に独立をめざす内蒙古軍と中共軍の接触を危惧し、その阻止を考慮せざるを得なくなった。

このような状況下で、一層強く紅軍の脅威を感ずるようになった蔣は共産軍討伐の強化をはかり、熱河の戦で日本に大敗を喫し、オーストリアの二倍の広さにあたる満州を失い、その責任を負うて家族とともに外遊していた張学良が、一九三四年に帰国するとまもなく、彼を河南、湖北、安徽の中支三省の剿匪総司令官に任命した。このような重

要な地位にありながら、張学良は後述のように剿共よりも内戦停止と抗日を主張しつづけていた。

一九三五年六月に梅津・何応欽協定が締結されると、張学良はこれに憤激して、この協定の内容を公表するとともに、国民政府の張に与える政策そのものに対して疑問を持つようになった。

張学良は、漢口において「我が国民政府は『無抵抗』政策を受け入れるように私に迫った。だが私は現在、わが指導者が、私の任務を剿匪任務から、日本帝国主義への積極的抵抗へと変えてくれるよう希望する。こうした剿匪作戦でこうむる犠牲は、日本に抵抗して出る犠牲ほどには価値はない、と確信する。」と声明した。

さらに、宋哲元が、日本の圧力によって辞職に追い込まれると、これに憤慨し「一九三一年九月一八日の奉天事件以後、我々は国際連盟に提訴し、その他のいろいろな平和協定に訴えれば、何とかなるという誤謬をおかした。その後退却した我々は、外部からの支援を望んだ。しかし、今、こうした幻想は全て消失してしまった。我々が自力で立ち上り、生死を賭て戦わねばならないことは明瞭であって、いまこそ南京政府は、日本軍に抵抗すべく、国の総力を動員すべきであろう。」と述べている。

上記のような張の言動を見れば、西安事件以前に、張がすでに蔣介石の政策に対して極めて批判的な考えを持っていたことは明らかである。

張・楊叛乱前夜

毛沢東や周恩来が延安において抗日統一戦線を打出している時も蔣介石は中国共産軍の主力討伐の手をゆるめなかった。張学良麾下の旧東北軍約一三万と楊虎城麾下の西北軍四万に赤軍討伐命令を出した。一九三五年一〇月になると張学良は東北軍を西安に移動した。これまで、義務怠慢であると非難されていた張は、西安に入ると積極的な剿共

作戦を展開し、二回の出撃を敢行したが、結果は大敗北に終った。[29] これ以後張の対共産軍行動は消極的となり、紅軍に対する攻撃回数は日ごとに減少して行った。張学良軍の下級将兵と中共軍の間には一種の不戦協定が結ばれ、休戦状態が成立するようになった。張麾下の東北軍は長期間にわたって中共軍と接触する間に共産軍の宣伝にのせられて次第に赤化していった。これにさらに、日本軍の満州占領に対する復仇心と懐郷の念が加わって彼等の行動を制約したのである。

中共軍の「中国人は中国人と闘うべきではない」「我々とともに満州へ帰ろう」のスローガンに影響を受けた[30]彼等は「内戦継続反対」、「満州の奪還」を望むようになり、友軍のように中共軍と行来をするようになった。このような部下の説得や抗日要求に影響されて張学良自身も中共に対する敵愾心を失い、蔣介石に対して内戦の停止と国共合同による抗日を提案した。[31] さらに張は、西北剿匪副司令でありながら、通敵罪にあたる行動さえとっている。すなわち一九三六年六月か七月陝西省の延安に敵将周恩来をたずね蔣介石と共産軍が連合して、日本に対抗する「連蔣抗日」の線で民族統一戦線の結成の約束を取り付けたのである。[32] 張学良はこの休戦協定の内容に従って、共産党の提案を受け入れるように蔣介石を説得する考えであった。

周恩来から張学良との会談の内容の報告を受けた中国共産党中央政治局は、これに検討を加えた上で、「反蔣抗日路線」から「連蔣抗日」へとその政策を転回した。

張学良の抗日要求

一九三五年末の戦闘後、張学良は次のような理由から蔣介石は東北軍の解散を狙っているのではないかと疑いはじめた。

㈠満州人部隊を分割して一部を万福麟の指揮下においた。㈡一九三五年末の戦い以後、張に補強兵力および武器弾薬を全然送らない。㈢地方軍を分割して破壊する戦術を東北軍に使いはじめた。それ以上に大きい原因は、紅軍の捕虜となっていた部下や周恩来の影響を受けた張が学生、インテリ、兵士を問わず中国の青年を共産陣営にかり立てている原因は「蔣介石の対日なれ合政策」にあると確信したところにあると思われる。[33]

一九三六年八月に毛沢東声明が出される頃には、中共軍と東北軍の間には事実上不戦協定が成立しており、張学良は共産軍の同調者になっていた。[34] 張は中国の全政党統一戦線の方針に沿う「民族救亡」活動の組織化に、積極的な役割を演じはじめた。張は西安の近くの王曲に特別士官軍事訓練所を設立した。極めて急進的な東北軍青年将校の一団が、張学良軍の兵士を掌握するようになった。

北京からは、東北大学の一部が西安に移って来て愛国宣伝の中心となり、張によって北京から招かれた学生達は孫銘久校長の下に特殊連隊政治訓練学校を形成した。ニム・ウェールズの言葉をかりれば「抗日運動は中国の他の地方では弾圧されているが、西安では青年元帥張学良の公然とした熱心な指導下にあり、彼の軍隊の熱烈な支持を受けている。あるいは、麾下の軍隊が、そのように行動するように彼に強いたのかも知れない。」[35]。このようにして、一九三六年秋ごろには共産軍と東北軍は蜜月時代に入り、市内には逼蔣抗日のポスターが張られ、共産党員が自由に出入りするようになり、西安は反日感情と抗日組織の一大基地となった。[36]

いたるところで局地的な休戦が行われ掃共作戦が進展しないのを見て西安の情勢を懸念した蔣介石は、甘粛の中央軍に対する第六次剿共戦の下準備と張学良を督戦するため一〇月自ら西安に飛来した。

蔣は、西安と蘭州に一〇〇機以上の爆撃機の配置と弾薬の集積を行い「二週間以内、長くとも一ヶ月以内に紅匪の

残党を剿滅する。」と闡明した。[37]

張は、この時蔣介石に「民族戦線の結成、内戦停止、ソヴィエトとの同盟、対日抗戦等を要求するとともに、東北軍は紅軍と戦う意志を持っておらず、綏遠事件以後は抗日運動を取れと命令されることを望んでいる。[38] 中共軍は真の愛国人士であって侵略者に大砲を向けている以上、紅軍と和解すべきである。」との意見書を提出した。[39]

しかしながら、蔣は、張に対してはいままで通り、紅軍の殲滅と全共産主義者を投獄するまでは、この問題に関して話し合うつもりはない、右の件が達成された時、はじめてロシアとの協力は可能となろうと回答し、軍の指揮官や軍事訓練所の学生に対しては、日本と戦うなどとは狂気の沙汰である、当面の敵は共産党であると強調した。

成都事件、漢口事件、綏遠事件などの相つぐ不祥事件の発生はさらに反日、抗日運動を激化させ西北にも大きな影響を与えた。

張学良は一一月には、さらに蔣介石に対して「東北軍の全部がだめなら、その一部でも良いから綏遠で日本軍と戦っている者を支援するために出動させて欲しい」との書簡を送った。[40] しかし蔣はこの要求を拒否した。さらに、張はその後まもなく、洛陽において蔣介石に自分と主義を同じくするという理由で上海で逮捕された救国会の七人の指導者の釈放を要求している。[41]

第六次剿共作戦

蔣は新たに剿共作戦を行うために第一軍の胡宗南将軍に、共産軍の攻撃命令を下していた。一一月初旬、胡宗南の率いる政府軍は甘粛のソヴィエト区に進入した。初戦の戦果に、共産軍をあなどった胡軍は深追いしすぎて一一月一八日紅軍によって分断包囲された。夜襲攻撃を受けて大打撃をこうむった胡は退却せざるを得なかった。[42]

この敗北に接した蔣介石は決定的な作戦を敢行し共匪を殲滅しようと決意した。このような情況下の一一月二七日、張はふたたび蔣介石に、危機にひんしている綏遠の抗日戦線に援軍として自分の部隊の一部に出動命令を下すよう要請した。[43]

一二月二日蔣介石は、張を洛陽に呼び説得を試みるとともにその要求に対しては綏遠に山西省を通じて軍を送りこむことは閻錫山が反対するするから出来ない、航空機を送りこむには空気が冷たすぎる、共産党は中国国民の主敵である、紅匪殲滅を妨げるものは断固として許さない、と告げた。張学良は蔣介石の、東北軍、西北軍の将領と会見するために再び西安に行くとの約束のみを持って西安に帰った。

その後、綏遠への増援部隊派遣必至を信じ対日憎悪の感情と抗日復仇の意気盛な東北軍に、共産軍討伐準備のための前進命令が出されたので、情勢はさらに緊張の度合を深めた。張学良麾下全軍の将校が抗日戦参加に賛成しており、隠然たる命令拒否の雰囲気、まさに一触即発状態の最中、一二月四日の朝、蔣介石は、剿共副司令張学良以下、東北軍、西北軍を督戦するために多くの国民党将領とともに西安に到着した。[44]

西安に着いた蔣は、ただちに張との協議に入った。蔣は張に対して共産党に対する討伐作戦を推進するように伝えた。張とその幕僚達は内戦を納めて対日抗戦を開始すべきことを強く主張した。[45]

蔣は日本に当る前にまず国内統一を達成するのが先決であり、国内統一の主眼は共匪の掃討であると述べ、共産党は現在南京政府と協力して反日戦争に立上る準備があるので、共産軍と妥協して民族統一戦線を結成して日本軍に当るべきであるとする張と意見が対立した。蔣介石は、張は共産党にまどわされているとなじり、張が自分を殺すとしても、剿共作戦を変更するつもりはないと断言した。[46]

一二月九日には西安の学生約一万人が内戦停止を要求するデモを行い、蔣総統に請願書を渡すために臨潼に向ったが、憲兵に支援された警察官が阻止しようと発砲し東北軍将校の息子である二人の学生が負傷した。[47]

現場に居た張学良が仲に入り、学生を説得し請願書を総統に手渡すことを約して事態を収拾した。蔣は張学良の行動は両側を代表しようとするものであって不忠実きわまりないときつく譴責した。蔣介石は二人の間に起ったこの事件が叛乱の直接原因になったと書いている。[48]

当時、張をはじめ、多くの中国人が、南京政府が綏遠において日本軍に積極的な抵抗または反攻を行うことを望んでいたが、張は中央政府にその気のないことを知っていた。

張学良は、綏遠に派遣された中央軍三個師団が、紅軍攻撃の移動に有利な綏遠省の南の省境に集結し、西安西方の隴海沿線に食糧、燃料、弾薬などの軍事物資が山積みにされているのを見、祖国防衛の愛国募金で建造された「誕生記念飛行機」八〇機が蔣介石の到着と同時に中共軍攻撃の一環として西安飛行場に着いたのを見た。ここに張学良は、蔣が西安に来たのは、彼の提案した諸要求を論ずるためではなく、反共戦闘開始を自ら監視するためであることを確信した。

蔣介石は東北軍の中に新作戦に対する抵抗のあることを知っていたので、東北軍の各指揮官と個別に会って、現在の中国には、日本を相手に戦う力はない、先ず共産軍の討伐が第一であると説得しようとしたが失敗した。

東北軍青年将校の間に、将に対する不満が高まる中で、一二月一〇日西北中国軍の指揮官達と蔣介石およびその将領との間に合同会議が開かれた。

蔣介石側は、共産党との戦闘推進を強く主張した。蔣介石は張学良およびその麾下の将兵の反対をおし切って、第

六次共産軍討伐作戦（第六次剿共作戦）の実施を決定した。

そして西北軍、東北軍および甘粛、陝西、潼関に駐屯中の南京軍に動員命令を下す準備が行われ、一二日に動員令が下されることになった。張に対しては、もし彼がこの決定に従わなければ、東北軍を解除し、張の指揮権を剝奪すると宣言した。[49] そして一二月一二日に共産軍掃討作戦再開の命令が西安で公布されると発表された。

蔣介石は、内外の情勢から、張学良にこれまで何回となく共匪掃蕩の厳命を発したが前述のように仲々らちがあかなかった。そこで、共匪討伐に功のあった蔣鼎文に西北剿共匪前敵総司令を命じ西安方面におくりこみ、張をさしおいて中央軍が討伐にあたることになったので、学良の立場が非常に苦しくなり蔣の処置を怨むようになった。[50]

蔣介石監禁事件

一二月一一日午後一〇時、張学良と楊虎城は、東北軍と西北軍の師団長会議を招集し、秘密緊急会議を行い、蔣介石とその幕僚を逮捕し、新しい反共戦争の発生を阻止することを決定した。

内戦停止、抗日統一戦線の結成を第一目的とする張は、蔣を生きたまま捕えるように厳命し、その行動隊長として張の親衛隊長であり東北特務連隊の隊長である孫銘久を選んだ。

西安迎賓館その他の西安市内の重要地点の包囲には、楊虎城の同種部隊があたることになった。

一二月一二日未明、張学良の叛乱軍は、国民党本部、鉄道駅、電話局、特殊本部、公安部などを包囲、占拠し、同時に、西安に居た国民党の将領も、全員逮捕し、空港では、南京側の爆撃機が全部捕獲された。

華清宮を襲った孫銘久の部隊は蔣介石の甥蔣孝鎮と護衛を射殺し、宿舎の裏山の岩かげにいた蔣介石を捕えた。これがいわゆる西安事件（双一二事変）である。

張学良はこの蔣介石の監禁を兵諫と称し、一二日の午後には、張学良、楊虎城、馬占山、于学忠などの名で中央政府、各省要人および全国民に通電した。西安事件に関するこの電文の中で、叛逆者達は、次の八項目からなる要求を行った。[51]

一、南京政府を改組し、各党各派を交えて救国にあたること
二、一切の内戦の停止と武装抗日政策の採用
三、上海で逮捕された全国救国連合の指導者の即時釈放
四、全国の政治犯の釈放
五、人民の集会、結社、その他のすべての政治的自由を保障すること
六、人民の愛国運動を自由にすること
七、孫文の遺志の実現
八、救国会議の即時開催

これは一二月に共産党が出した七項目の宣言と同じものであり、中共の主張の代弁であり、中国民族主義の流れを強く反映したものだったので中国紅軍、中国ソヴィエト政府、中国共産党は直にこれに支持を与えた。

蔣介石・周恩来会見

蔣介石を監禁した翌一三日、張学良は、自分の飛行機を保安に飛ばし、周恩来、葉剣英、博古を乗せて西安に帰還させた。自分一人では事件の解決は出来ないと知った張が周恩来の助力を求めたのである。東北軍、西北軍および中共軍の三者はただちに合同会議を開き、この三軍からなる抗日連合軍軍事委員会を結成し張学良が主席、楊虎城が副

主席となった。この三軍の支配下にある地方では直ちに八項目が実施された。

一二月一五日から一九日の間に周恩来は蔣介石に会い、紅軍に対する攻撃を中止し、抗日戦線を結成するならば、㈠共産党は紅軍を蔣介石の指揮下に入れ、抗日戦に参加させる、㈡反国民政府活動を中止し国民党と協同して抗日に専心する、㈢ソヴィエト区における土地政策を放棄する、㈣国民政府を改組し、人民戦線派を参加させる、と提案した。蔣介石は頑として拒否しつづけて来たが、一二月二四日になると折れてきた。周恩来は、共産党が蔣と国民党を不利な立場に置く考えはなく、あくまでも平和解決を望んでいること、抗日戦線の指導者に蔣介石がなること、過去のいきさつをすてて、挙国一致の態勢をとること、蔣介石の指導にしたがう方針であることを説明した。[52]

蔣介石も最後にはおれ、㈠紅軍を武装解除の形で中央軍に改編し、中共軍上級将校は現在の資格で中央軍に入れる、㈡共産党は「大衆党」と改称する、だが合法的な存在と破壊工作は許さない、㈢ソヴィエト区を解消し、省、県制にする。事実上の社会主義実験工作は許可する、㈣国民政府改組は、南京に帰った後政府当局と合議すると回答した[53]といわれる。これを証明する明確な資料はないが、その後の動きから見て蔣介石は国共合作による抗日と内戦停止に関しては共産党と叛乱軍の主張を容れたものと思われる。[54]とにかく叛乱軍と共産軍は蔣介石の釈放を決定した。

中共の指導者達は、西安事件という絶好の機会を逃さず、直ちに蔣介石に働きかけ、彼を窮地から救出することによって蔣を内戦停止と抗日統一戦線という中共戦線に引入れることに成功した。これによって蔣も国共合作を承認せざるを得なくなった。周恩来の仲介によって事件は解決し、蔣が南京に帰還することによって抗日民族統一戦線形成の糸口が見出された。

張学良・楊虎城の兵諫の理由

張は南京政府に対して、権限を有する公的な代表を西安に送って、八大綱領の線に沿って政策を検討するよう要請したが、南京政府は代表を送らなかった。この時に南京政府と張が十分に話し合っておれば国共合作は実現しなかったかも知れない。

一二月一六日、張は革命公園で開かれた大衆集会で演説し、その中で蔣介石逮捕の理由を次のように述べている。

「二人の基本的な意見の対立は、日本帝国主義に対して彼のとっている政策に関するものであった。過去、私は何度も手紙を書き、話し、彼が人民の意思に反してまで、続けている政策をやめるよう説得した。彼は私の訴えをすべてしりぞけた。……最近、蔣将軍は上海で、我が救国会のリーダー七人を逮捕した。……私は彼等の逮捕に抗議する。彼等の原則が私の原則と同じだからだ。……蔣将軍は鉄砲を敵に向けることを拒み、それを自分の人民に向って使うためにとっておこうというのだ。だから私は最後の手段として楊虎城将軍や西北人民の全指導者と結び、一二月一二日の革命的行動に訴えざるを得なかったのだ。私は自分個人のためには利益もいらないし、領土もいらない、その代り私の願うところは、武装して前線にある全同志諸君とともに、日本帝国主義と死ぬまで戦うことにある。」

張はまた、一二月一九日に、ロンドンタイムズの論説に反論するための電報を同紙の中国通信員フレイザーに打っている。その中で次のように西安事件の動機について述べている。「蔣介石を拘禁するようになった理由は、ザ・タイムズが非難するような『個人的または略奪的野心の愛好』とか『いい条件を引張り出そうとする望』とかはまったくありませんし……個人的動機も全然ありません。それはただ、単に中国の政策を決定的に変えるという保障をとりつけようとして起したものにすぎません。政策の決定的変更とは、祖国防衛のために武器をとって立ち上ること……絶え間ない内戦に積極的に終止符をうつこと……匪賊の追求をやめることです。われわれは、中国の力が、中

国人民に対してではなく、侵入して来る敵に対して、向けられることを要求しているのです。国民軍はこれまで、日本軍に対して一歩も動いたことがありません。にもかかわらず、それはいまや電光のような早さで私に動員されています。敵が国内にいるというのに……われわれは委員長が指導性を発揮することを望んでおり、どんな形であれ、彼の権力の縮少を望んでいるわけではありません。……彼をその位置から引き下そうとか、干渉しようとかいった動きもありません。われわれは、今でも蔣介石を委員長として扱っています。……事態を協議する資格のある誰かが南京から来さえすれば、委員長は都に帰り彼の職務にもどることが出来るのです。」

楊虎城もニュージーランドのジャーナリストの質問に対して「我々が蔣介石氏を監禁したのは、抗日政策の採用、内戦反対という民衆の希望を容認せしめるためであった。我々の決起は、国際的な反ファッショ平和戦線と離れられないものであり、我々の唱える抗日は西南派の抗日と異り、明確な目標たとえば、政治犯の釈放、言論集会の自由、共産党との提携などがあり、かつ民衆運動に基いている。我々の叛乱が匪賊のような暴動だとか、日本と関係があるとか、或は汪兆銘と関係があるとの新聞報道はすべて虚構である。または張学良が八千万元を要求したというような説も単に風説にすぎない。我々がモスクワからの指令を受けているという説もあるが、これも事実無根である。……蔣介石氏はあまり長く親日分子と交わっていたため抗日を恐れてしまった。しかし今日の叛乱で、蔣介石は親日分子から隔離されたので、急に我々の抗日要求を容認するにいたった。蔣氏が抗日に目覚めたので我々の軍隊も彼を釈放したのである。[55]かくて支那側の抗日共同戦線は全く完成された。予は蔣介石氏が今後真の抗日戦線のリーダーたることを確信している。」と答え、さらに続けて西安事件は「突発事件でも、二人の将軍の通謀工作でもない、西北の全軍隊と民衆が要求した行動に他ならない。われわれの行動には個人的な憎しみなど入る余地がない。われわれの欲

するのはただ抗日戦争の開始と内戦停止だけだ。われわれは蔣介石将軍にべつに文句があるわけではなく、われわれが何より欲するのは、敵に対して共に手を組んで、戦うことにつきる。われわれの要求は簡単だ。『国内に平和を、外に対しては、民族侵略者と闘って打倒せよ』。」[56]と述べている。

これを見てもわかるように、張学良が要求したのは、蔣介石の「先安ㄴ内後攘ㄴ外」政策を「内戦停止、抗日」政策へ転換することであった。[57]

四　西安事件に対する各方面の態度

中国共産党

一二月一九日には中国共産党は西安事件に対する党の公式態度を表明する回覧通電を発した。その中で、西安の指導者達は愛国的で真摯な情熱から、速かに日本に対する即時抗戦の国策を形成せんことを願って、行動したと信ずる旨を述べさらに南京において国内の全政党代表者出席のもとで平和会議を開くこと、南京、西安の両軍に潼関を境界線として休戦協定を結ぶことを提案した。[58]

叛乱軍の急進的な青年将校や兵士は蔣の処刑を望んでいた。毛沢東もはじめは、蔣介石を反逆者として人民裁判にかける考えだったので、モスクワからの蔣の釈放指令を受けた時、彼は真赤になり足を踏みならして怒った。[59]だが当時の中共にはスターリンの強硬姿勢に反抗する力はなく、またそれが中共にとっても有利であったので共産党は蔣の救命に奔走した。中国共産党は蔣介石の釈放だけでなく南京政府の指導者としての地位への復帰を強く主張した。[60]共

産党は蔣が釈放されるならば彼は内戦を停止させざるを得なくなり、統一戦線綱領のすべてを実施すると信ずるに足る保障を得ていたといわれる。[61]

中共が自己の地位を維持し統一戦線を結成するためには蔣の地位と威信をそこなうことなく南京に帰す必要があった。彼が処刑されれば、内戦は拡大し抗日戦線の達成は不可能となる。かかる状態は、いかなる党も利せず、苦しむのは中国であり、得をするのは日本である、というのが当時の共産党の考えであった。[62] それに加えて、内戦の継続は、共産党そのものの生存を危うくする現状が、中国共産党をして、蔣を釈放せざるを得なくしたのである。

中国の軍閥

中国の軍閥は始めは静観の態度をとっていたが二三日になると河北の宋哲元と山東の韓復榘が平和的解決を主張し、戦争反対を表明した。当時の中国の軍人、政治家の大半は内戦の停止を希望していた。

綏遠事件をおこした徳王も「喪に加えず、凶によらざるが戦の道」と言って西安事件発生と同時に停戦を申し出た。

英国と米国

英米は中国中央政権の動揺は両国の在支権益に影響をおよぼすと考えて中央擁護主義を堅持した。

事件勃発と同時に英米両国は中国に対して金融安定のために援助をおしまないと声明し中国金融市場の安定に大きな貢献をした。この声明によって国民政府の財政破綻は回避され、蔣介石の権威は益々高められた。英米は金銭的にも人的にもなんら負担することなく中国の感謝と善意を獲得したのである。

日本

日本政府は中国に対して、なんら同情を見せず「時局を静観する」との無気味な声明を出しただけで、「大東亜共栄圏」「五族共和のスローガン」とは裏復に、北支侵攻を推進した。その結果中国民衆の排日、抗日運動を激化させた。

ソヴィエト

「イズヴェスチァ」と「プラウダ」はソヴィエトの西安事件に関する責任を否定するあまり、張学良を弾劾し、蔣介石を賞賛し、事件は汪精衛と日本が作りだしたものだという話をデッチ上げた。そして一四日にはスターリンは「連蔣抗日政策をとり一〇日以内に蔣介石を釈放せよ」との指令を出した。

南京政府

西安事件のニュースを知らされ、張学良によって八項目の要求をつきつけられた国民政府は対応策を討議するため中央執行委員会の常務委員会、中央政治委員会の緊急会議を開き、直に張学良を叛徒とし軍事委員会委員および西北剿共副司令職を剝奪し、蔣総統の釈放を要求し、もし従わなければ討伐を開始するとの布告を出した。[63] そして財政部長孔祥熙が行政委員長代理として蔣の後任に、軍政部長何応欽が討逆総司令に選ばれた。

孔祥熙は全国民に対して、ラジオで武装叛乱軍とは取引はしない。共匪との妥協などありえない、たとえ叛徒を実力で掃滅することになっても、政府の尊厳な立場はあくまでも堅持すると表明した。

ついで国防部長何応欽が西安の叛徒討伐隊の編成指揮を割当られた。何は南京軍二〇個師団を動員し河南、陝西省境に向けて進軍させるとともに爆撃機を用いて叛乱軍を攻撃した。

南京政府が叛乱軍との交渉に応じなかったので一四日には宗美齢は手紙を持たせて、蔣総統の顧問であり、張学良

の友人でもあるオーストラリア人W・H・ドナルドを西安に派遣した。彼は同日午後南京政府に電報で蔣介石の無事と張学良が孔祥熙および宋美齢の西安来訪を切望していることを伝えて来た。

一二月一七日蔣介石は西安で釈放された腹心の部下、蔣鼎文に「一週間以内に首都に戻れると思うので、その間武力発動と爆撃を中止してほしい」旨したためた何応欽宛の手紙をたくした。[64] 蔣鼎文は翌日南京についたが南京政府の上層部には「ただちに軍を動員して西安討伐作戦を発動すべきだ」との強硬意見もあり、一時は蔣総統の手紙の受取り拒否までしたが、和平交渉によって問題を解決すべきだと主張する蔣夫人宋美齢や義兄の宋子文、首相代理孔祥熙などの努力によって、とにかく宋子文が個人の資格で、西安に行くことになった。[65] 宋は一二月一九日に飛行機で西安を訪問し張と会談して二日後の一二月二一日ドナルドをともなって帰京し、平和解決と蔣の早期釈放の可能性が強いと報告した。宗子文は南京軍当局から、三日間だけの軍事休戦の保障をとりつけ、一二月二二日宋美齢をともなって、再び西安に行き、蔣介石の釈放に奔走した。

先にも述べたように、蔣介石の身柄拘禁は個人的野心とか私怨から発生したものではなく、共産軍に対する大規模な「剿共」作戦再開を前に、中国の対外政策および対内政策の根本的変更を促す目的でおこされた政治行動である。それ故、叛乱軍側は蔣が政策転換に原則的にでも同意するなら、いつまでも拘禁して「内戦を終らせるための新たな内戦」を引おこす考えはなかったのである。[66]

十二月二二日に西安に到着した宋子文、宋美齢、拘留中の蔣およびその参謀達と張学良、楊虎城、周恩来、東北軍の将校との間に会談が持たれた。

蔣介石とその側近は、張学良の「八大綱領」を前向きに考慮することに同意したので釈放され、内戦勃発は回避さ[67]

れた。

蔣介石は、「中国共産党は確かな保障が得られるなら、南京政府に全面的協力をする。紅軍の名称を変更して北西ソヴィエトを中華民国の特別区に編入し、抗日戦線が実現するまでは、農業改革と社会革命の政綱の停止を約束する」[68]との周恩来の条件に妥協したのである。蔣釈放の要因は南京政府の内戦再開を強行しようとする姿勢と蔣介石自身の毅然たる態度および宋美齢の努力であった。蔣介石がいなくなれば、真の中国の民族統一は不可能となり、中国が分裂すれば日本の野望に有利な情勢を生み出す結果になる、と判断した張は恭順を誓い蔣に同行して南京に行くことを決意した。

一二月二五日蔣は釈放されて張をともなって洛陽に着き、盛大なる歓迎を受けた。

五　国共合作

西安で蔣が約束したと思われることは非常に屈折した形ではあるが、実現の方向に動き出した。南京に帰還した蔣介石は、直に陝西からの政府軍の撤退を命令するとともに辞表を提出した。しかしこれは受理されなかった。蔣介石は一二月二九日に中央委員会の緊急常任理事会を召集して、一　張学良の処分を軍事委員会にゆだねること、二　西北問題の解決を軍事委員会に一任すること、三　西安攻撃を目的とする討伐司令部を廃止すること、四　叛乱軍に対する攻撃を停止することを要求し、これが認められた。一九三六年一二月三一日、南京政府は軍法会議を開き、張学良に一〇年の懲役、五年間の市民権の剝奪の判決を行った。

だが四日後、蔣の勧告によって刑期は免ぜられたが市民権剝奪の上国防委員会の監視下に置かれることになった。張学良は自分の軍隊とはなれて一人、二五年間軟禁状態で台湾で過し、一九六一年になってやっと釈放された。

共産党は西安事件によって国共合作の足がかりを作ることによって、平和協定と和解、政治的自由の拡大をかち得た。[69] 一九三七年一月六日、蔣総統の西安剿匪司令部は廃止され、その二日後には親日派と見られていた張群外交部長が解任され、かわって英米派の王寵恵が外交部長に任命された。

西安事件は、支那の統一を阻害し、中央政府に反抗しようとする者は国民の敵として全国民から排撃されることと南京政府に対する国民の支持の強さを証明した。共産党は国共合作の必要性を感じ、一九三七年二月一〇日国民党の三中全会宛に次のような提案を送った。[70] (一)内戦を停止し一致して外敵に当る、(二)言論、集会結社の自由とすべての政治犯の釈放、(三)各党各派、各界、各軍の代表者会議の召集、(四)抗日抗戦準備の早期完成、(五)以上の条件を国民党が承認すれば、共産党は次のことを保証する。(一)国民政府を転覆するような武装暴動を中止する。(二)ソヴィエト政府を中華民国特別区、紅軍を国民革命軍と改名し直接南京政府ならびに軍事委員会に従属させる。(三)特別区の区内において普通選挙を実施し、民主制度を実施する。(四)土地没収政策の中止、抗日民族統一戦線の共同綱領を執行する。

日本からの軍事的圧迫と全国的な抗日運動の高まりの中で、この提案を受けた国民党は、三中全会を開催し、この共産党の要求を拒絶した。一九三七年二月二一日には「赤禍根絶案」を決議成立させた。これは赤化の根絶を主張しながら他方においては、共産党が前非を悔い、三民主義を奉じ、国法に従い、軍令を守ることを誓い、善良な国民になるならば、その新生を妨げるものではないと述べ、共産党を容認する条件として、(一)紅軍の即事解消、(二)ソヴィエト政府と党組織の解消、(三)赤化宣伝の停止、(四)階級闘争の停止を明示した。[71] 三月五日には共産党と妥協したのではな

く、共産党が完全に屈服したのであると声明し、実質的には共産党の提案を受諾した。

だが国民党内には国共合作に反対する者が相当あり、蔣介石自身も全面的な合作をためらっていたが、一九三七年七月七日支那事変が勃発するや、彼は本格的な国共合作に動き出した。同年八月二一日には中国共産党の創始者陳獨秀を釈放し、八月三一日には蘇州の高等法院に収監されていた沈鈞儒、王造時、李公撲、沙千里、章乃器、鄒韜奮、史良が釈放された。一方中国共産党は、七月八日蔣介石に「紅軍のすべての将兵は委員長の指導のもとに、国家のために命を捧げることを願う」と打電した。八月二二日には中国共産軍は、国民革命軍第八路軍として国民政府軍事委員会の指導下に入り、朱徳がその総指揮官に、彭徳懐が副指揮官に任命された。共産党は全国の党員に「中国共産党は蔣委員長を擁護し抗日戦のために突進する」[72]との通電を発した。

一方ソ連との関係については、南京政府は一九三七年八月二一日に中ソ不可侵条約を締結し、中ソ関係の改善を図った。この条約によって、中国は、日本との交戦期間中は、ソ連が日本に対して直接、間接をとわず援助を与えないこと、支那に不利にはたらくような一切の行動や協定を行わないとの約束をとりつけた。この中ソ関係の改善の動きは国共合作にも大きく影響し、九月二二日中国共産党執行委員会は「精誠団結・一致抗的宣言」によって次の四政策を表明した。一、三民主義の実現に最善を尽す、一、国民政府の転覆、赤化宣伝、土地没収等の諸政策を停止する、一、中国ソヴィエト共和国政府を解消、民主政治を実行し、全国政権の統一を期す、一、紅軍を国民革命軍に改編し、国民政府軍事委員会の指揮下におく。このいわゆる「四項諾談言」に応じて蔣介石は翌二三日、次のような声明を出した。「暴動政策を放棄し、赤化運動を取り消し一致救亡禦侮に集中することを必要条件としているのは本党三中全会の宣言及び決議と等しきものであり、三民主義の実現を宣称せることは、更にこれを証明するものといわねば

ならぬ……政府は過去の如何を問わず誠心誠意、国民革命、抗戦禦侮の旗幟の下に奮闘するものを容れるであろう。中国共産党もすでに、我見を放棄し、国家の利害と民族の利害の重要なることを確認している。国民政府は国民党の指導下において各党各派が救国の実をあげるあらゆる機会を提供する用意を有する、共産党もわれわれの同志として抗日、救国へ合作されんことを望む[73]。」ここに蔣介石ははじめて国共合作を正式に声明し、国民政府は剿共政策を放棄し、共産軍との第二次合作をとげるにいたった[74]。改造された国民政府の国防最高会議には周恩来、朱徳が参加し、軍事委員会の中に設けられた政治部には周恩来が副部長として就任した。これ以後中国は全国人民一致抗日の時期に入ったのである。このように第二次国共合作、抗日民族統一戦線の完成を実現させたのは西安事件と一九三七年七月七日の盧溝橋事件であった。蔣介石が述べているように「中日八年間にわたる戦争は『死んだ灰がまた燃え出す』機会を中共に与えた[75]」のである。日中防共協定の締結を日中国交調整の眼目としていた日本にとって、これはまさに歴史の皮肉という他はない。

注

① 梨本祐平『周恩来』　勁草書房　昭和四二年　一三五～一三六頁。

② 殿田孝次『新支那読本』　高山書院　昭和一五年　二三五頁　胡華著東京大学中国研究会訳『中国新民主主義革命史』五月書房　一三二頁。
Nym Wales, Inside Red China, Doubleday, Doran & Company, Inc., New York, 1939　ニム・ウェールズ著　高田爾郎訳『中国革命の内部』　三一書房　一九七六年　三三〇頁には、共産軍は指揮官張輝鑛を戦死させ小銃九〇〇〇挺、無線機二台を鹵獲し一個師団を捕虜とした、とある。

③ 殿田前掲書　二三六頁　胡喬木『中国共産党の三十年』民主新聞社（学習の友（別冊）No.6）三〇頁。

④ Otto Braun, Chinesische Aufzeichnungen, Dietz Verlag, 1975.　オットー・ブラウン著　瀬戸鑒吉訳　『大長征の内

幕』　恒文社　一九七七年　二六頁、朝日新聞東亜部『中国共産党』　月曜書房　昭和二二年　一二八～一二九頁。

⑤ 梨本前掲書　一三七頁。

⑥ W. Macmahon Ball, Nationalism and Communism in East Asia, Melbourne University Press, Melbourne, 1952. マクマホン・ボール著　大窪愿二訳『アジアの民族主義と共産主義』　岩波書店　一九五四年　四七頁。

⑦ 上村伸一　『日華事変(上)』（鹿島平和研究所編　『日本外交史⑲』　鹿島研究所出版会　昭和四六年　二五六頁）。

⑧ 同書二五五頁。

⑨ 前掲『大長征の内幕』　七〇頁。

⑩ 梨本前掲書　一四一～一四四頁。

⑪ 董顕光著　寺島正、奥野正己訳『蔣介石』　日本外政学会　昭和三〇年　一六九頁。

⑫ 『毛沢東選集　第一巻』　中国国際書店一九六八年　二一八頁。

岩村三千夫　『中国革命史』　青年出版社、一九七六年　一五一～一五二頁。

⑬ 高木健夫『中国風雲録』　鱒書房　昭和三〇年　二三〇頁。　小島昌太郎『支那最近大事年表』　有斐閣　昭和一七年　五九八頁。

⑭ 前掲『中国革命の内部』　三五五～三五九頁。

⑮ Jerome Ch'en, Mao and the Chinese Revolution, Oxford University Press, 1965. ジャロームチェン著・徳田教之訳「毛沢東」筑摩書房　一九七一年　一六二頁。

⑯ 赤松祐之　『昭和十一年の国際情勢』　日本国際協会　昭和一二年　二七八頁。

⑰ 同書　二七九頁。

⑱ 同書　二七九頁。

⑲ 同書　二八一頁。

⑳ 同書　二八二頁。

㉑ 前掲『大長征の内幕』　四二頁。

㉒ James M. Bertram, Crisis in China—The Story of the Sian Mutiny, Macmillan and Co., London, 1937. J・バー

トラム著　岡田丈夫・香内三郎訳『西安事件』　大平出版社　一九七三年　一二八頁。

㉓ 高木健夫　『中国革命史談　夢と爆弾』　番町書房　昭和四七年　三一二～三一三頁。

㉔ Edgar P. Snow, Red Star Over China, Grove Press, Inc., New York, 1968.　エドガー・スノー著　松岡洋子訳『中国の赤い星』　筑摩書房　一九七六年　三五一頁　三五二頁。

㉕ 中保與作『赤色アジアか防共アジアか』　ダイヤモンド社　昭和一二年　六三頁。

㉖ 殿田前掲書　二七〇頁

㉗ 穆欣編　田島淳訳　『中国に革命を―先駆的言論人鄒韜奮―』サイマル出版　一九八六年　二三六頁。

㉘ 前掲　『西安事件』　一三〇頁。

㉙ 同書　一三二頁。

㉚ 前掲『中国の赤い星』　一七頁。胡華　前掲書　一六九頁。

㉛ Edgar Snow, Journey to the Beginning, Random House, New York, 1958. 邦訳松岡洋子訳『目覚めへの旅』紀伊国屋書店一九六八年一三五頁　ニム・ウェールズ『中国は震感している』(梨本前掲書　一六一頁)　胡華前掲書　一六九頁。

㉜ 梨本前掲書　一六一～一六三頁　サンケイ新聞社『蔣介石秘録』サンケイ出版　昭和五一年　一六七―一六九頁。

㉝ 前掲『西安事件』　一三三頁。

㉞ 石丸藤太　『蔣介石』　春秋社　昭和一二年　三四五頁。

㉟ 前掲『中国の赤い星』二八二頁。

㊱ スメドレー著、高杉一郎訳『中国のうたごえ』みすず書房　昭和三七年　一二一頁　西河毅　『周恩来の道』　徳間書店　昭和五一年　一五六頁。

㊲ 蔣の日記(『中国の赤い星』　二八三頁)　西安半月記(前掲『西安事件』三二二頁)。

㊳ スメドレーの著書にも、東北軍将兵は日本軍と戦うことを望んでいたとある。　(前掲『中国の歌ごえ』一二二頁) Agnes Smedley, The Great Road: The Life and Times of Chu Teh.　A・スメドレー著　阿部知二訳『偉大なる道(下)』岩波書店　一九五九年　一一三頁。

㊴ 前掲　『中国の赤い星』　二八三頁。

㊵ 一九三七年一月二日の西北軍事委員会発表の蔣介石宛張学良の書簡（前掲『中国の赤い星』二八四頁）。
㊶ 同書　二八四頁。
㊷ 前掲『西安事件』一三六頁。
㊸ 前掲『中国の歌ごえ』一二三頁。
㊹ 蔣介石『西安日記』（萱沼洋『中国革命四十年』福村書店　一九五四年　二〇頁）。
㊺ 前掲『西安事件』一三八頁。
㊻ 岩村三千夫『中国革命史』青年出版社　一九七六年　一六四～一六五頁。
㊼ 前掲『中国の歌ごえ』一二四頁。
㊽ 『西安半月記』（前掲『西安事件』三四九～三五〇頁）前掲『中国の赤い星』二八六～二八七頁。
㊾ George Paloczi-Horvath, Mao Tse-Tung: Emperor of the Blue Ants, Secker & Warburg, London, 1962. G・パローツィ・ホルヴァート著　中嶋嶺雄訳『毛沢東伝』河出書房新社一九七二年　一六三頁。
㊿ 石丸前掲書　三四五頁。
(51) 菅沼前掲書　三八頁　前掲『中国共産党』一五五頁　岩村『中国革命史』一六五頁。
(52) 西河前掲書　一六二頁。
(53) 波田野乾一『赤色支那の研明』大東出版社　昭和一六年　一一九～一二〇頁。
(54) 叛軍機関紙『解放日報』によれば最終妥協条件は、前記の八要求の上に次の六項目を承認したとある。㈠中央軍を潼関外に徹収する。以後の内戦の責任は蔣に帰す、㈡内戦停止、国力集結、㈢致外敵に向う、㈣国民政府改組、各方の人材を集めて抗日主張を容認、㈤外交政策の改変・支那の解放に同情する国家との連繋、㈥沈章等釈放、㈦陝甘軍事は張・楊に委托（『赤色支那の研明』一二〇～一二一頁）。
(55) 一九三七年一月四日　東京日々上海特電（田中忠夫『支那現下の政治動向』学芸社　昭和一二年　一八〇～一八一頁。
(56) 前掲『西安事件』一九七頁。
(57) 同書　一六三～一六五頁。
(58) 同書　一六一頁。

㊾ Edgar Snow, Random Notes on Red China (1936-1945) Cambridge Mass. Harvard Univ. Press, 1957. エドガー・スノー著　小野田耕三郎、都留信夫訳　『中共雑記』　未来社　一九六四年　二一―二九頁。

㊿ Dick Wilson, Zhou Enlai: A Biography, New York: Viking, 1984. ディック・ウィルソン著　田中恭子、立花丈平訳『周恩来』　時事通信社　昭和六二年　一三五―一三七頁。　H・W・ドナルドは「西安事件で蔣総統を無事に釈放してくれたのは……実に周恩来その人だった。」と述べている。(同書一三六頁)。

(61) 前掲　『中国の赤い星』　二九六頁。

(62) 前掲　ディック・ウィルソン　『周恩来』　一三五頁。

(63) 前掲　『中国の赤い星』　二九〇頁。

(64) 前掲　『西安事件』　一七一頁。

(65) 同書　一七二頁。

(66) 同書　一七四頁。

(67) 前掲　『中国の赤い星』　二九六頁。

(68) 前掲　『西安事件』　一七五頁。

(69) 同書　三四一頁。

(70) 前掲『中国共産党』一五六～一五七頁、殿田前掲書、二七三～二七四頁。

(71) 岩村前掲書　一六七頁『中国の赤い星』三〇〇頁。

(72) 殿田前掲書　二七六頁。

(73) 前掲　『中国共産党』　一五九頁。

(74) 殿田前掲書　二七七頁。

(75) 蔣介石著　毎日新聞社外信部訳　『中国の中のソ連』　毎日新聞社　昭和三二年の日本版序文。